

資料紹介

「小倉進平関係文書」中の金沢庄三郎の書簡について

石川 遼子

はじめに

ここに紹介するのは、学習院大学東洋文化研究所に所蔵される「小倉進平関係文書」中の、金沢庄三郎が発信した書簡六二通で、一通を除き、小倉進平に宛てて書かれたものである。同研究所による『小倉進平関係文書目録―学習院大学東洋文化研究所所蔵―』（「調査研究報告」No.60）において、「シリーズ1 書簡」中の「発信人別」の83～139番、「朝鮮語学史謝礼」の25番、「学位取得」の28番、「郷歌吏読」の3番、「祖母逝去」の8番、「昭和12年賀状」の17番、「その他」の1番、「名刺」の117番にあたるものである。以下、これらを「金沢書簡」と略記する。また、本文中敬称を略することをお許しいただきたい。

「金沢書簡」には、封書とはがきがほぼ半分ずつある。また、明治・大正期は殆どが毛筆で書かれているが、昭和期は殆どがペン書きである。昭和四年から使用される便箋は、左下に「三越製」と印刷されたものである。書

簡の文体は、昭和四年六月に朝鮮の京城から帰宅後の礼状が「此度は久し振に御目にかゝり誠に嬉しく思ひました。」のように口語体（くです、くます）で書かれているほかは、すべて文語体（ぶんご）で書かれている。書簡はいずれも簡潔で、本文が五〇字に満たないものもあり、多くが二〇〇字前後で、三〇〇字を超えるものは数通に過ぎない。引用の際は、適宜送り仮名や句読点を補うことにしたい。

金沢庄三郎（明治五〇昭和四二、一八七二―一九六七）は、大阪の商家に生まれ、明治一七年に唯一の官立中学校であつた大阪中学校に入学した。大阪中学校は、大学分校、第三高等学校と改称され、二三年に京都へ移転する（のち第三高等学校となる）。二六年に東京の帝国大学文科大学博言学科に入学し、K・フロレンツ、上田万年、外山正一、坪井九馬三、L・リース、R・ケーベル、黒川真頼、三上参次等の教えを受けた。二九年七月に卒業して大学院に進み、三一年一〇月から三年間、大韓帝国に留学する。留学中の三三年に東京外国語学校韓語学科の教授に任じられ、帰国後教壇に立った。三五年、東京帝国大学（三〇年に帝国大学を改称）文科大学の朝鮮語の講師にも任じられ、また、「日韓両国語比較論」と「動詞論」により六月一日付で文学博士の学位を授与された（『官報』六月二二日第五六八〇号掲載）。そして翌三六年九月、小倉進平が文科大学言語学科（三一年に博言学科を改称）に入学してくるのである。

仙台に生まれた小倉進平（明治一五〇昭和一九、一八八二―一九四四）は、金沢より一〇歳年少である。三九年七月、橋本進吉・伊波普猷と共に文学科（言語学専修）を卒業し、研究科を経て大学院に進んだ。小倉にとつて、金沢は恩師であるとともに、朝鮮語に関わる研究者として先輩あるいは同士の関係になる。四〇年春に金沢編纂の国語辞書『辞林』が刊行されるが、小倉はその最終校正に岩橋小弥太・折口信夫・金田一京助・後藤朝太郎と共に加わった。その翌年の四一年四月から、この「金沢書簡」が始まっている。

一 「金沢書簡」の概要

「金沢書簡」のなかには、小田省吾（朝鮮総督府学務課長）に宛てた書簡（大正三年七月二二日付）が一通あるが、内容が小倉に関わるために小田から小倉へ手渡されたものと思われる。このなかで金沢は小田に吏道諺文の古書を集めた小冊子を編纂してはどうか、そして、その説明原稿を小倉に作成させた上で自分も卑見を述べたいと伝えている。

また、紹介状としての名刺が一枚あるが、金沢が小倉に宛てて、「駒澤大学々生丁鳳允氏御引見下されたく願ひ上げ候」と記したもので、日付はない。昭和六年七月二二日付の書簡で、金沢は丁に対する指導について小倉に謝意を表している。名刺に記された駒込曙町七番地は昭和六年頃まで記された住所であり、朝鮮人留学生の丁鳳允が駒澤大学の東洋学科に入学したのは昭和四年度であるので、「引見」を依頼したのは六年六～七月のことであろうか。

「金沢書簡」の発信は、明治四一年（一九〇八）四月から昭和一六年（一九四一）九月までの三三年半に及ぶ。それは、金沢が三六歳から六九歳まで、小倉が二六歳から五九歳までの年月にあたる。これを年別に分けると、下表のようになる。

発信が多かった時期は、①明治四四年、②大正六、七、八年、③昭和四年、④昭和六、

明治41	明治44	大正2	大正3	大正4	大正6	大正7	大正8
2	4	1	(1)	1	4	9	5
大正9	大正10	大正13	昭和2	昭和4	昭和5	昭和6	昭和7
3	1	1	1	6	1	6	6
昭和8	昭和10	昭和11	昭和12	昭和13	昭和15	昭和16	計
1	1	2	1	2	1	1	61

（大正3年は小田省吾宛。名刺は省いた。）

七年である。①は小倉が朝鮮総督府に勤めることになって京城へ転居する年、②は金沢が東京外国語学校教授と東京帝国大学講師を辞任して京都へ転居し、その間に朝鮮を訪問し、また朝鮮で三一独立運動が起こった時期である。③は小倉が『郷歌及び吏読の研究』と『平安南北道の方言』を、金沢が『日鮮同祖論』を刊行した年である。④は金沢の還暦祝賀行事として祝宴や記念論文集発行などが行なわれた時期であった。

封筒と葉書に書かれた金沢の住所、および小倉の住所は、次のとおりである。

金沢庄三郎 本郷区駒込曙町七番地（明治四一年四月二日付）大正四年六月七日付）

京都上賀茂村（大正六年一月一日付）八年三月二十五日付）

本郷区駒込曙町七番地（大正八年六月一日付）昭和二年二月二八日付）

本郷区駒込曙町二五番地（昭和四年四月二四日付）一六年九月二六日付）

小倉進平 代々木山谷一四九（明治四一年四月二日付）

小石川区中富阪一九 滝川方（明治四一年一月二二日付）

代々木山谷一四九（明治四四年四月一三日付）六月九日付）

朝鮮京城新橋通官舎（大正二年一月三〇日付）

京城太平通官舎六号（大正四年六月四日付）七年三月三〇日付）

京城朝鮮総督府学務局編輯課（大正七年四月六日付）

朝鮮京城太平通官舎（大正七年五月一三日付）六月五日付）

朝鮮京城総督府学務局（大正七年六月二二日付）

朝鮮京城太平通官舎（大正八年三月五日付）一〇年一月二日付）

朝鮮京城總督府學務局（大正一三年六月一七日付）

朝鮮京城岡崎町六（昭和二年二月二八日付）

朝鮮京城府三阪通一一七（昭和四年四月二四日付）八年一月五日付）

仙台市小田原山本町五（小倉の母逝去のため、昭和一〇年九月三〇日付）

本郷区西片町十ほノ三（昭和一一年四月一六日付）一六年九月二六日付）

小倉は大正一三年（一九二四）八月から一五年三月まで言語研究のため欧米へ留学を命じられ、同年四月に京城帝国大学教授に就任し、昭和二年一月二七日付で『郷歌及び吏読の研究』により博士の学位を得た（『官報』一月三十一日第二六号掲載）。そして八年には東京帝国大学教授となつて京城帝国大学教授を兼任し、住居を東京に移した。

「小倉進平関係文書」には、「金沢書簡」六二通と別に、金沢夫人多喜が小倉夫人常子に宛てた書簡が二通ある。大正七年三月に京都の上賀茂から送られた葉書と、同八年五月に東京の駒込曙町から送られた封書で、いずれも金沢が朝鮮滞在中に小倉から受けた配慮に対する礼状であり、金沢の書簡の内容を補うものである。多喜夫人は達筆で、書くことを厭わなかったからであろうか、金沢書簡の中には多喜夫人が代筆したものがいくつかある。なお、本稿で示す発信日（～日付）は、金沢が書状本文の最後に記した年月日である。封筒に押された消印の日は、二、三日遅れていることがある。

では次に、「金沢書簡」において新たに注目される点をいくつか挙げたい。

二 「金沢書簡」において注目されること

1 小倉進平の朝鮮総督府赴任に関わって

明治四四年（一九一一）、韓国併合の翌年であるが、五月一三日付の書簡で金沢は小倉に対して履歴書一通、翌朝九時までに持参するよう依頼した。その後小倉は六月三日付で朝鮮総督府事務局に採用され、金沢は六月八日付書簡で、「御出発の御準備も着々御進行の事と存じ居り候」と書いている。また、この件については二人の恩師である「上田先生」（上田万年、当時東京帝国大学文科大学評議員・国語学国文学教授）に委細を伝えているので、一両日中に電話であり、京城へ移ることを上田に報告しておくように、また、「朝鮮総督府学務課長小田省吾氏は今回の事に付き御尽力相成り候のみならず、御渡鮮の上は直接課長の事ゆえ」、対面して挨拶しておくべきである、一〇歳若い小倉に対する助言を添えている。

そして翌九日付で、「先刻総督府より電報為替にて御旅費一四一送付相成り候間、私方まで御受取に御出で願ひ上げ候」と指示している。「一四一」は、当時の運賃・宿泊料・支度料などから勘案して、一四一円のことと推察される。したがって、五月一三日付における履歴書が朝鮮総督府に提出されたと確定することはできないにしても、小倉の朝鮮総督府赴任において金沢が何ほどか関わったのであろうと推測される。小倉に対する金沢の影響についてしばしば言及される、「私をして専ら朝鮮語研究を思ひ立たせ、朝鮮行きを御推薦下さつたのも博士であつた」（『郷歌・吏読の問題をめぐりて』『史学雑誌』四七編五号）ということばに通じるものと思われる。

2 小倉進平に対する金沢庄三郎の依頼や要請

「金沢書簡」には、東京にいる金沢が京城に住んでいる小倉に書籍の入手や知人への配慮を依頼し、援助を受けたことがたびたび書かれている。なかでも書籍の調査、購入、送付、書店との交渉などの依頼が多く、これについては次項³で述べるが、そのつど小倉は金沢の要請に応えた。朝鮮へ赴く知人の世話や、教えた生徒の指導を小倉に託することも何度かあった。

明治四一年一月二日付の書簡では、雑誌『帝国文学』（東京帝国大学内帝国文学会発行）に掲載する金沢の「講演筆記」を早く仕上げるよう促しているが、これはたぶん同誌四二年一月号に掲載される論文「外来語に就いて」のことで、小倉に浄書を依頼していたのであろう。金沢は論文などを締切日よりかなり早く入稿する習慣があったようで、前月二日とされた『帝国文学』の締切日を念頭においてのことと思われる。

大正七年（一九一八）六月五日付では、北里^{きたざと}蘭^{らん}（明治三〇昭和三五、一八七〇～一九六〇）が来訪して小倉の尽力に感謝していたと伝えている。北里は、大阪府立大阪中学校（現在の大阪府立北野高等学校）、同志社を経て國學院に入学し、明治二九年に卒業した。私費でミュンヘン大学に留学したが、ライプチヒ大学に転学し、明治三四年、日本古代文字研究が学位論文として認められた。帰国後は学習院で二年間（明治三六～三八年）ドイツ語を教えたのち、大阪医科大学のドイツ語と倫理学の教授となる。日本語の起源に強く関心をもって、『古事記』『日本書紀』『風土記』等の漢字を詳細に調べ上げ、フィリピン諸島で言語の調査にあたって、蠟管^{ろうかん}に録音して持ち帰った。ひとかたならぬ努力の末に、『日本古代語音組織考』（大正一五、一九二六）、『日本語の根本的研究』（昭和五、一九三〇）を著した。北里は、「日本語は南洋フィリピン語と朝鮮語の混成」（『日本語の根本的研究』）であり、「日本人の祖先は南洋フィリツピン^{（マヤ）}民族と朝鮮民族との混血」（同上）であるとの結論に達したが、学界

に受け入れられなかったようである。

「小倉進平関係文書」には北里から小倉に宛てた書簡が含まれており、北里は大正七年七月一五日付で、「真言集の手に入りし事は小生の研究にとりて何よりの仕合に御座候　これひとへに学兄の御尽力の結果と・・・」と喜びを伝えている。また、『日本古代語音組織考』において朝鮮の真言集に触れたところの註で、「金沢庄三郎博士及び同氏の紹介によつて未見の友となつた小倉進平氏の好意により、大正八年春此の真言集を手にする事の出来たのを深く感謝する次第である」と述べている。

昭和六年（一九三二）一月二八日付で金沢は、國學院大學の学生、有賀秀久（国文学科昭和四年度入学）が前年の夏から小倉の指導を受けたことに、また、北山長雄が書面で指導を受けたことに謝意を表している。北山は有賀と同年で、出身地である青森県の方言・語彙の研究者となつた。同年七月一二日付においては、訪朝する國學院大學教授河野省三（こうのせいぞう明治一五〇昭和三八、一八八二〜一九六三、国学・神道学）に対する配慮を要請し、また、既に紹介状の名刺で触れた駒澤大学の留学生、丁鳳允について、「種々御懇情を蒙りし趣申し参り居り候」と謝している。丁鳳允は昭和六年、朝鮮仏教青年総同盟東京同盟が発行する機関誌『金剛杵』（こんどうしよ）の第一九号に、「教界現状の諸問題について」と題して一〇頁程の論文を寄稿している。七年に卒業論文として「古代朝鮮文化の研究」を書き、駒澤大学を卒業した。解放後には、ソウル市の学務課長のほか、善隣中学校や城東工業学校の校長も務めた（『大韓民国建国十年誌』）。

翌七年五月二二日付では、國學院大學を卒業して朝鮮で教育に従事したいという有賀のことで再び指導を依頼し、翌月には有賀が種々世話になったことで礼を述べている。有賀はその後、鎮海高等女学校や京城第二高等女学校の教諭の中に名前が見える。このように國學院大學と駒澤大学の関係者が多いのは、金沢が國學院大學では

明治二九年から英語に始まって国語学を教え、駒澤大学は昭和三年から東洋学科で国語学・国文学を教えていたからである。

金沢自身も、大正七年と昭和四年に朝鮮を訪れた際に、京城で小倉の配慮を種々受けたようである（大正七年三月三〇日付・昭和四年六月五日付）。さらに大正八年の三・一独立運動勃発の際には、再三にわたって小倉に詳細な報告を要請したが、これについては4項で述べる。

大正七年六月二一日付では、「促音仮名遣は「(k) ㄱ (s) ㅅ (p) を書分る方朝鮮人の實際に適するやう考へられ候 篤と御研究希望致し候」と書いている。対象となった資料が何であるか明らかではないが、当時朝鮮総督府事務局編輯課で教科書編纂に従事していた小倉に対する、教科書における説明のしかたについての要請であろうか。促音について金沢は、明治四四年七月の講演「朝鮮語に就て」、あるいは、四五年三月の講演「国語教授上参考すべき事項」において語ったことがある。国語では促音はすべて「ㄷ」で表わすが、朝鮮語では「ㄱ ㄷ ㄴ」の四つがあつて、次に来る音に同化されないもので、「ㄷ」のみで促音を教えようとするから困難を生じる、日本語では「列車」（れっしや）は *res-sa* のように、次にくる音と同音で表わしうることを理解させるのがよいのではないかと述べていた。朝鮮人に教える際に理解しやすく、発音が容易になるという観点からの提案と思われる。

3 論文・書籍類の依頼や贈呈など

金沢が小倉に購入と送付を依頼した書籍は、次のようなものであった。

『朝鮮書目解題』（大正四年六月四日付）、『儒胥必知』^{じゆしよひつ}（大正六年二月一日付）、『朝鮮光文会出版目録』（大正七年二月八日付）、『朝鮮古書刊行会刊行本』（『大東野乘』、『渤海考』、『八域誌』、『破閑集』、『文獻撮録』、『星湖僊説』^{せいこさいせつ}、『芝峰類説』）（大正七年二月二七日付）、『朝鮮彙報』大正七年四月号（金沢「吏読の研究」掲載分、大正七年五月一三日付及び六月五日付）

そして、小倉が自ら金沢に送呈した論文・書籍には次のようなものがある（金沢が「貴著」「高著」などと書いているものは時期から推測した）。

「御高著」〔『朝鮮語学史』か、大正九年二月二三日付〕、『国語及朝鮮語のため』（大正一〇年一月二一日付）、「貴著」二部〔『郷歌及び吏読の研究』『平安南北道の方言』か、昭和四年五月四日付〕、「諺文珍書四冊」（昭和四年二月二八日付）、小倉論文別刷（「狐を意味する朝鮮方言」か、昭和五年一〇月八日付）、「稀本慶尚道地誌二本」（昭和六年一月二九日付）、「貴著」〔『朝鮮語に於ける謙讓法・尊敬法の助動詞』か、昭和十三年二月一三日付〕、「貴著」〔『増訂朝鮮語学史』か、昭和十五年五月一五日付〕、「御高著」〔『朝鮮館訳語』語釈』か、昭和十六年九月二六日付〕

一方、金沢は小倉に対して、昭和四年四月に『日鮮同祖論』を送呈した。

そのほか、「金沢書簡」において言及された論文・書籍は次のようなものである。

金沢『朝鮮書籍目録』（明治四四年四月一三日付）、小倉「論文」（『慶尚南道方言』か、大正四年六月四日付）、金沢「拙著」（不明、大正九年八月一四日付）、『普通学校朝鮮語漢文 卷二』（大正七年六月五日付）、『二切経音義』（昭和六年七月二日付・八月一日付）、小倉「朝鮮の真言集」（『金沢博士還暦記念 東洋語学之研究』寄稿分、昭和六年一月二九日付）、『大般涅槃經疏玻璃版』覆製一冊（博物館叢刊第一冊）（昭和六年二月一三日付・二〇日付）、『三国史記』（坪井九馬三博士より承り候）とある、昭和七年二月七日付、「仏教諺解」（昭和七年六月一日付・七月五日付）、金沢『濯足庵藏書六十一種』（昭和七年二月一〇日付）、『大東金石書』（昭和八年一月五日付）、『史学雑誌上御論文』（小倉「郷歌・吏読の問題を繞りて」か、昭和一二年四月一六日付）

「史学雑誌上御論文」とは「史学雑誌上御論文御掲載の件御丁重に御申し聞け下され謝し奉り候」と述べているもので、小倉が「郷歌・吏読の問題を繞りて」を『史学雑誌』四七編五号（昭和一一、一九三六）に掲載することを前もって金沢に伝えたことと思われる。小倉の「郷歌及び吏読の研究」（『京城帝国大学法文学部紀要第一』、昭和四、一九二九）は、刊行後すぐに高橋亨、前間恭作、土田杏村によって書評が書かれていた。昭和一〇年に梁柱東（当時平壤の崇実専門学校に在職）が書評「郷歌の解説、特に願往生歌に就いて」（『青丘学叢』一九号）を書き、金沢に抜き刷りを送ってきたのだが、金沢はこれに誘われて自らも『史学雑誌』四七編二号（昭和一一）に「吏読雑考」を投稿した。このなかで金沢は、梁の見解が「全般に亘つて頗る肯綮に中るものがある」と述べ、十数か所にわたって小倉の解釈に対する批判を述べている。こうした経緯のもとに、以上の五氏の書評に対する回答として、小倉は「郷歌・吏読の問題を繞りて」を執筆したのであった。

また、論文・書物のほか、小倉は金沢の好物である「平壤栗」や「支那白菜」を送り、金沢が小倉に栄太樓の菓子を送ることもあった。

4 小倉夫妻に関わること

「金沢書簡」には、当然のことながら、小倉進平・常子夫妻の生活に触れたものがある。

大正四年（一九一五）六月四日付で、「奥様には御妊娠の趣、誠に御目出度く大慶至極に存じ上げ候。折角御大切に御撰養の程祈り上げ候」と、祝辞と見舞いの言葉を送った。七年六月二日付では、常子夫人が病から回復したようで、「御令室御入院の処既に御全快の趣、祝着至極に存じ候」とある。昭和に入つて、六年（一九三二）一月二八日付は、「過般来中耳炎にて御病臥候由、御案じ申し上げ候。已に御快方とは存じ候へども、此際一層御養生の程祈り上げ候」とあつて、小倉がしばらく中耳炎を患っていたことに對する見舞いである。

また、小倉の両親の訃報にも接した。昭和二年二月二八日付に「御国許に御不幸ありし趣」とあるのは小倉の父長太郎の逝去であり、一〇年九月三〇日付は小倉の母しんの逝去に對する弔辞である。

一五年五月一五日付では、小倉の体調がよくないのを氣遣つて、「先般来御病氣の趣、最早御快癒の御事と存じ候へども、時分柄折角御大切に相成り候様祈り上げ候」と記している。

5 金沢庄三郎の京都生活について

大阪に生まれ育つた金沢庄三郎は、大阪で通つた第三高等中学校が明治三二年に京都に移転したために四年間を京都で過ごしたが、二六年に帝国大学に入学して、東京生活が始まつた。しかし、大正六年二月、四五歳で再

びの京都生活を送ることになる。

大正五年（一九一六）二月、金沢は東京外国語学校朝鮮語学科（明治四四年一月韓語学科を改称）教授の辞表を提出し、六年一月に聴許された。翌二月には東京帝国大学の講師も辞任する。二校の辞任については、以下の6と7も参照していただきたいが、韓国併合（明治四三、一九一〇）後、朝鮮語が外国語とみなされなくなり、大正五年度から朝鮮語学科の生徒募集がされなくなったという状況があった。金沢は六年二月八日、多喜夫人とともに東京を離れて京都へ向かい、上賀茂に住まうことになる。この時期の「金沢書簡」においては、「京都 上賀茂村 金沢庄三郎」という住所氏名印が押印されており、ある程度長期にわたって住む気持ちがあったと思われる。その後東京へ戻るのがいつであったのか、確定できなかったのだが、「金沢書簡」によってかなり判明することになった。

大正八年三月、朝鮮において三・一独立運動が起こった直後の一三日付の書簡には、次項6に述べるように、事件の成り行き、特に学生の動静について時々通報してくれるよう小倉に依頼するとともに、「幸に元氣回復し候まゝ、本月末当地引払ひ東上の予定に候」と記している。さらに二五日付で、「昨今転居の準備にて、彼此多忙に暮し居り候」とある。したがって、やはり三月末には東京に戻っていたのであろう。大正六年十一月から同八年三月までの一六通の書簡は、京都時代の金沢を知るうえで貴重な資料である。

6 三・一独立運動に対する金沢庄三郎の関心について

大正八年（一九一九）三月一日に京城で勃発して全土に波及した独立運動に対する金沢の強い関心は、「金沢書簡」のなかでもとりわけ興味深いものであった。当時京都に隠棲していた金沢は、三月五日付の書簡で、「今度の

朝鮮騷擾の様様一応承知致し置きたく候に付、支配上御差支なき範圍に於て詳細至急（書面を以て）御通知下されたく、此の段御願申し上げ候」と要請している。この書簡に他の用件はなく、「朝鮮騷擾」のことだけである。小倉はすぐに報告を送ったようで、金沢は一二日付で「早速の御詳報 忝く存じ候」と謝し、「今後とも事件の成り行き、特に学生の動靜、時々御通報下されたく願ひ上げ候」と重ねて要請した。併合して八年半になる朝鮮で起こった「騷擾」に、金沢は大きく心を揺さぶられたようである。その要請に應えて小倉は再び報告を送っており、金沢は二五日付で、「過日は御細書拝誦仕り候、尚今後とも折々の御音信、偏に祈り上げ候」と書いている。そして、金沢は三月末に京都を離れ、東京へ戻った。三・一獨立運動を知ったことが、彼の東京帰還を促すことになったのかもしれない。

六月に入っても一日付で、「貴地最近の様子並に諸学校の近状承知致したく候に付、御手数ながら書留便にて至急御一報下されたく、右御依頼まで申し上げ候」と希望している。そして書簡には、「支配上御差支なき範圍に於て」、「書留便にて」などと記して、小倉の一身上に迷惑がかからないようにとの配慮がうかがわれる。

それにしても、以上のような金沢の要請に対して、小倉はどのような報告を書き送ったのだろうか。小倉の書簡が発見されることを切に願う次第である。

日本の朝鮮支配において金沢は、日本人と朝鮮人の相互の言語の教育と相互の同化を主張し、「朝鮮語排斥を基礎とする日本語の普及策は必ず失敗に終るに違いない」（「再び朝鮮に於ける国語問題に就いて」『読売新聞』明治四三年一月二〇日）、あるいは、「朝鮮人はやはり朝鮮人なり、固より之を日本人化すると云ふことは急務なるも、歴史を滅し、性情を取り換へると言ふことは容易の業にあらず」、「朝鮮人を日本の忠良なる臣民と化せざるべからざると同時に、朝鮮人は即ち朝鮮人なりと言ふことを忘るべからず」（「余の朝鮮人教育意見」『朝鮮』第

三五号、明治四四年一月」と発言したことがあった。そのような心情と主張が、日本の朝鮮支配に対して起こった抗日運動への関心につながったといえようか。

金沢の書簡においては、特に「学生の動静」や「諸学校の近状」に対する関心が強い。その点からいえば、金沢が辞任した大正六年の一月から、東京外国語学校では校名を東京貿易殖民語学校に改称しようとした文部省と校長村上直次郎に対して、校名を存続させたい生徒たちの反対運動が巻き起こり、卒業生の応援も得て、新聞でも大きく報道されていた。その結果、校名改称はもはや持ち出されなくなったのだが、一方で、朝鮮語学科は五年度も六年度も募集されず、七年三月二八日の卒業式で、朝鮮語学科は最後の四名の卒業生を送り出したのである。その翌日の『読売新聞』や『朝日新聞』で、村上校長が金沢を排除したのだという生徒の発言が報道された。金沢自らに関わるこの事件における生徒の運動や発言が、それから一年後の三一独立運動における「学生の動静」に対する強い関心につながったのではないだろうか。また金沢は、著書『言語に映じたる原人の思想』（大正九）の「跋語」に、「地と民と語とは相分つべからず……徒らに国語の統一を夢み、各地土着の言語を無視度外するの政策は国家の禍なり」と述べて、最後に「大正八年十月七日稿」と記している。独立運動が勃発してはまだ余波の残る時にこのように書いた彼の心情も、諸学校や学生の近状について小倉に報告を要請した文言から理解されるのではないだろうか。

なお、金沢は八年九月二三日付書簡で、「小生永らく総督府囑託在任の処、今般御用満ち解囑の旨小田氏より通報これ有り候。拙者退任後も何卒十分御勤勉、邦家のため御努力の程切望致し候」と書いている。金沢が朝鮮総督府から朝鮮語に関する調査を囑託されたのは、韓国併合の翌年、明治四四年六月のことであった。

7 『朝鮮語学史』の序文執筆について

小倉進平の代表的な著書のひとつとなる『朝鮮語学史』が刊行されたのは、大正九年（一九二〇）十一月のことである。それに先立つ八月一日付の金沢書簡は、刊行の知らせを「欣喜この事に御座候」と喜びながらも、「序文ノ件御申越し相成り、御心易き事ながら、頃日健康を損じ、当分執筆等一切差し止められ居り候に付、此の儀悪しからず御諒察下されたく願ひ上げ候」と記している。小倉は『朝鮮語学史』の序文を執筆してくれるように金沢に依頼していたわけだが、金沢は辞退を申し入れてきたのであった。しかし小倉は金沢の「健康」上の理由に納得できず、再び懇望したことが、次の金沢の九月二〇日付書簡から推察される。金沢は、「御申越しの儀、決して他の理由あるにあらず、全く静養中にこれ有り候為、何卒悪しからず思召し下されたく」と述べて、辞退の理由はほかにあるのではないかという小倉の推測を否定し、重ねての懇請にも応じなかった。

金沢の東京外国語学校と東京帝国大学の辞任については5と6で触れたが、この問題をめぐって服部四郎（明治四一〜平成七、一九〇八〜一九九五、東京大学教授）の回想がある。服部は東京帝国大学言語学科で主任教授藤岡勝二（明治五〜昭和一〇、一八七二〜一九三五）の指導を受けたのだが、「日本語と朝鮮語との親族関係は未証明なのにそれに関して独断的な意見を学生に押しつけられるのは困る、とのお考えに基づくものだ」と仄聞したことがある。」と、金沢に対する藤岡の評価を紹介しているのである（服部四郎「藤岡勝二先生に関する補説」『言語学ことはじめ』）。金沢は、自らの辞任に関わるこのような経過と状況にかんがみて、小倉の著作の序文を執筆するべきではないと判断し、固辞したのではないかと思われる。まもなく刊行された『朝鮮語学史』の序文は、藤岡勝二によるものであった。なお付け加えれば、二〇年後の昭和十五年（一九四〇）に刊行の『増訂朝鮮語学史』（刀江書院）に藤岡の序文はない。

8 日本言語学会の役員就任をめぐる

昭和十三年（一九三八）五月二八日、東京帝国大学で日本言語学会の創立大会が開催された。役員として、会長に京都帝国大学名誉教授の新村出（明治九〇昭和四二、一八七六―一九六七、東京帝国大学言語学科明治三二年卒業）、副会長に東京帝国大学教授・京城帝国大学教授兼任の小倉進平、そのほかに一六名の評議員と五名の幹事が承認されて、事務所を東京帝国大学文学部言語学研究室に置くことになった。記念行事として、福島（のちに改名）直四郎による「言語学と文献学」、柳田国男による「鴨と哉」、白鳥庫吉による「寺及び仏の語源」の講演があった。

「小倉進平関係文書」の「シリーズ1 書簡」には「言語学会」としてまとめられた書類があつて、これにより学会立ち上げに至る過程をある程度追うことができる。日本言語学会設立の動きは昭和九年の暮頃に始まったようだが、この時はそれ以上に進展をみなかった。一二年の初頭、再び設立を希望する声が高まり、毎月相談の会合が開かれて準備が積み重ねられた。そこには、小倉進平、服部四郎、八木亀太郎、泉井久之助、高津春繁、井桁貞利、新村出、金田一京助等の名前がみられる。一三年に入つて、創立有志者から発起人候補者（約一六〇名）へ発起人承諾の依頼状が送られた。金沢もその対象の一人であり、その後発起人として名前が挙がつている。そして、二月二七日に発起人会が開催されて、八杉貞利（明治九〇昭和四一、一八七六―一九六六、ロシア語学者）が座長を務め、会則を作成して、会長と副会長が推挙された。その他の役員（評議員と幹事）については会長に一任されることになったが、すでに評議員として二〇名の名前が挙がつており、金沢も含まれている。

「金沢書簡」に表われているのは、金沢が評議員に就任するかどうかの問題をめぐる、金沢と小倉と新村の間に交わされたやりとりである。金沢は、発起人会から三週間後の三月二一日付で小倉に宛てて、「昨日新村氏より

言語学会評議員の件に関し御申越しこれ有り候に付、相応の事は相勤め申すべく候へども、年来閉じ籠り居り候ため、集会などに出席は御容赦これ有りたき旨御答申上げ居り候。されば評議員其の他の役員に御推挙の儀は御免を蒙りたく、予め御断り申上げ候。」と書いてある。この書簡だけでは事情が分かりにくかったので、「小倉進平関係文書」に所蔵される新村出の小倉宛書簡も参照した。また、京都市の新村出記念財団重山文庫に所蔵される、新村宛の金沢書簡と小倉書簡、そして、やはり評議員就任をいったん断った八杉貞利の書簡を参照することにより、およそその成り行きについて理解を深めることができた。

新村は小倉に三月一五日付で、「本日金沢、保科二氏に懇書さし出し申し候」と記している。また一七日付で、八杉が辞退しているので再度懇請していると伝えた。結局、八杉は一八日付で新村に、「万事貴意に御委せ申上げ候」と承諾を表明している。

一方金沢は、新村の一五日付の「懇請書」に対する返事であろう、一八日付で新村に、「小倉氏御来訪下され候までもなく、相当の御用は相勤め申すべく候へども、相変わらず引籠りがちにつき会合などに出席は御容赦下さるべく候」と記した。会合に出席しなければならぬ評議員は辞退する、という意味で書いたのであろう。しかしこれは、会合に出なくてもよいのなら評議員になってもよいという意味に解される可能性もあろう。新村はこの文章を控えめな承諾と受け取ったのである。新村は小倉に一九日付で、「八杉、金沢二氏より評議員承諾書到来、安心せり」と書いている。

小倉は新村に一八日付で、「金沢先生御宅には数日中に御伺いたすべく」と書いている。そして金沢を訪問したのだが、金沢は不在であったので、小倉は伝言を遺した。ここで金沢は、始めに採り上げた三月二日付の小倉宛の書簡を書いて、評議員などの役員は御免蒙りたい、お断りしたいと、もはや誤解を生ずることのないように

表現したのである。そして、金沢は新村に宛てて二三日付で、小倉が金沢の不在中に来訪したこと、その伝言から判断すると、新村に宛てた金沢の一八日付書簡が意を尽していなかったと思われるので、再度申し上げたいと、次のように記している。

「小生儀先年上賀茂へ移転の際より種々考慮の結果、史学会をはじめ一切の会より脱退致し、音声学会より数次の入会懇請をも謝絶せしことに御座候へども、此度は特別の關係とて発起人だけは黙諾致し置き、将来雑誌に研究を発表して応分の微力を尽したく存じ居り候。役員に列して会合に出席いたすことは御容赦下されたく、小倉氏は名前だけにて宜しと仰せられ候由なれど、それは小生のなほ堪えがたきことにこれ有り候。右事情悪しからず御推察下されたく、此段重ねて御願申上げ候。」

新村は二三日付で小倉に宛てた書簡（書留）の中で、「金沢氏よりの初信には、評議員の諸否明記あらざりしを、文意によりて承諾のことと察し候ひしは小生の速断に候。本日の再信により不承諾に近き意味記るしあるを見候につき、唯今の所は未定のままにのこしかれ、四月小生入京面談のをりまで双方考慮中の姿としては如何なものにや如何。」と述べ、「事を円満にまとめゆくには中々困難が伴うものに候。即時急激に決定すること丈はお待ち下されたく候」と助言した。

こうして、四月二五日に第一回評議員会が開かれ、会則の修正のほか、会計担当、雑誌編集担当を決め、創立大会について話し合われたうえで、五月二八日に言語学会の創立大会が開催された。参考までに評議員の氏名を記しておくと、市河三喜、伊波普猷、落合太郎、金田一京助、小林淳男、神保格、田中秀央、千葉勉、東條操、西脇順三郎、橋本進吉、福島直四郎、保科孝一、松本信広、八杉貞利、山田孝雄であった。幹事は高津春繁、木村彰一、小林智賀平、八木亀太郎、井筒俊彦であった（『言語研究』創刊号、昭和一四）。

会員は、発足当初は二名の名誉会員（白鳥庫吉と高橋順次郎）と、維持会員、普通会員で構成された。維持会員は年額会費として五円を納めるもの、一般会員は三円を納めるものであった。『言語研究』第五号（昭和一五）に掲載の会員名簿によると、金沢は維持会員になっている。会員数は研究団体を含めて三〇五名、そのうち維持会員が七七名であった。

9 金沢庄三郎還暦祝賀行事について

金沢庄三郎は、昭和七年（一九三二）に還暦を迎えた。六年八月頃、國學院大學に金沢博士還暦祝賀準備会が設けられ、岩橋小弥太を代表に小倉も含めて金田一京助、今西龍、奥山仙三、折口信夫等一九名が実行委員となつて、祝賀事業を計画し、実施に移していった。祝宴の開催、記念論文集『金沢博士還暦記念 東洋語学の研究』の発刊、画家伊原宇三郎による肖像画の制作、そして金沢による蔵書目録『濯足庵蔵書六十一種』の刊行である。このような祝賀に対する感謝のしるしに金沢は、吏読について論じた『新羅の片仮字―比較国語学史の一節』を贈呈した。

「金沢書簡」では、六年七月一二日付に、「老生儀に付き一方ならぬ御尽力に相預り候由、岩橋氏よりも承り居り候」と書いている。ただ小倉は京城に住んでいたので、記念論文集に寄稿するほかには準備や進行に加わることはあまりなく、金沢が書簡で経過を伝えることもあった。八月一日付では、還暦祝賀の依頼状ができたことと書いている。十一月二九日付には、「玉稿も既に御恵投下され候趣」と、小倉が「朝鮮の真言集」を寄稿したことに感謝し、また、肖像画は「帝展の伊原画伯御揮毫中」と伝えた。伊原宇三郎の肖像画制作は、折口信夫を介してのことである。伊原は折口が大阪府立今宮中学校嘱託教員時代に教えた生徒で、終生折口を敬愛したのであった。

七年一月一八日付では、「十一日記念講演会並に祝宴とも盛大に取り行はれ、大に面目を施し申し候」と、満足し喜んでゐる様子がうかがわれる。一二月一〇日付で、記念論文集はまもなくのこと、『濯足庵六十一種』は来春に刊行されると記し、別便で祝宴の記念写真を送ると知らせた。

おわりに

「小倉進平関係文書」における金沢の書簡は、必要なことだけが淡々と記されている。季節の挨拶、小倉の健康への気遣い、小倉夫人への配慮、自身の状態に簡単に触れるほかは、研究上必要な書籍に関する質問と依頼、そして知人の世話の依頼である。そのなかで、三・一独立運動の様子、特に学校や学生の動静について何度も報告を求めたことは、とりわけ強い関心が表わされたものといえよう。また、日本語学会の評議員就任問題では曖昧な表現のために誤解をもたらししたが、決して就任の懇請に応じなかったところに、しばしば周囲の人々を辟易させたことで逸話になっていた彼の頑固さが表れている。

「金沢書簡」は、金沢の動静と人間関係、また彼の問題意識や関心のありようを具体的に伝えるものであり、新たな事実に接することも多かった。師弟関係から始まった二人のやりとりのなかに、論文や著書には抑制されてしまう心情や人間関係の機微に触れるものが表出されている。それをどのように解釈するべきか、たやすいことではないにしても、これまでに把握したことをあらためて検討する余地を提供してくれるものであった。金沢庄三郎と小倉進平、さらにその周辺についての理解が深まる、貴重な資料であると思う。「金沢書簡」の閲覧を許された東洋文化研究所に対して、深く感謝する次第である。

本稿は、さまざまな個別的問題を深く考察するに至らない不十分なものに過ぎないが、私の個人的な関心にとどまらず、一読して下さった方々に何か少しでも参考になることを願っている。

【付記】平成二十七年（二〇一五）に、前年刊行の拙著『金沢庄三郎』が機縁となって、東洋文化研究所の辻大和氏（当時助教）から「金沢書簡」の閲覧と報告のお誘いを受けたことは、本当に嬉しく、ありがたいできごとであった。その際には簡単な報告書を提出することしかできなかったが、よく分らない点をもう少し調べて、できれば他の方々の参考になるようにしたいと思ってきた。その後、辻氏を通じて新村出記念財団の重山文庫に所蔵される金沢庄三郎、小倉進平、八杉貞利等の書簡を閲覧する機会が得られて理解が進み、昨年に現在の助教の植田喜兵成智氏から投稿のお尋ねがあったので、まとめてみることにした。本稿は、そのような経緯を経た「資料紹介」である。東洋文化研究所、辻氏、植田氏、そして新村出記念財団に深く感謝する次第である。

参考文献（刊行年順、西暦）

- 金沢庄三郎『言語に映じたる原人の思想』、大鏡閣、一九二〇
北里闌『日本古代語音組織考』、啓光社（東京）、一九二六
『開校五十年記念 学習院史』、学習院、一九二八
『國學院大學一覽 昭和四年』、國學院大學、一九二九
『駒澤大學一覽 昭和五年五月現在』、駒澤大學、一九三〇

北里 蘭『日本語の根本的研究』、紫苑会（大阪府豊中町、代表北里 蘭）、一九三〇

金沢 庄三郎『吏読雑考』『史学雑誌』四七編二号、史学会、一九三六

小倉 進平『郷歌・吏読の問題を繞りて』『史学雑誌』四七編五号、一九三六

『人と文献（小倉進平博士）』『学報』IV、日本民族学会、一九三七

小倉 進平『日本言語学会の創立』『帝国大学新聞』第七二三号（昭和十三年六月六日）、一九三八

『言語研究』創刊号（一九三九）、第五号（一九四〇）、第一六号「故小倉博士追悼号」（一九五〇）、日本言語学会

『大韓民国建国十年誌』大韓民国建国十年誌刊行会編纂・発行、一九五六

河野 六郎「故小倉進平先生と朝鮮語学」『小倉進平博士著作集（四）』、京都大学文学部国語学国文学研究室、一九七五

服部 四郎『言語学ことはじめ』服部四郎発行、一九八四

小倉 芳彦『贅疣録』（私家版）、研文出版制作、一九八七

『言語研究』別冊（日本言語学会五〇年の歩み）、日本言語学会、一九八八

八木 亀太郎『寒来暑往』、三春会編、温山会、一九八九

河野 六郎『小倉進平』『東洋学の系譜（第2集）』大修館書店、一九九四

中村 完『小倉進平』『朝鮮人物事典』大和書房、一九九五

『金剛杵』上・下、復刻版、原書は一九二四〜一九四三年に断続的に刊行、韓国近現代仏教資料全集、民族社（ソウル）、一九九六

三ツ井 崇『植民地日本知識人と朝鮮語―言語学者小倉進平の言語思想と朝鮮語学―』『不老町だより』第三号、世界社会言語学会、一九九八

安田 敏朗『言語』の構築―小倉進平と植民地朝鮮』、三元社、一九九九

福井 玲編『小倉文庫目録 其一 新登録本』『朝鮮文化研究』第九号、東京大学大学院人文科学系研究科・文学部朝鮮

文化研究室、二〇〇二

小倉 芳彦『樟蔭歲月記』（私家版）、二〇〇三

三ツ井 崇『小倉進平 朝鮮語学の確立とその背景』『36人の日本人 韓国・朝鮮へのまなざし』、明石書店、二〇〇五

藤本幸夫「重山先生と小倉進平先生」『泰山木』、新村出記念財団、二〇〇六

福井玲編「小倉文庫目録 其二 旧登録本」『韓国朝鮮文化研究』第一〇号、東京大学大学院人文科学系研究科韓国朝鮮文化研究室、二〇〇七

大熊智之「近代日本の言語学と植民地日本語普及論―欧米との関係性からみる小倉進平の朝鮮へのまなざし―」『北大史学』第四七号、北大史学会、二〇〇七

田口文章「北里柴三郎博士の従弟「北里蘭博士」(「北里柴三郎博士の秘話」)、インターネット、二〇〇九

鄭承喆「小倉進平の生涯と学問」、講演記録、『二〇〇九年度東京大学コリア・コロキウム講演記録』、東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室、二〇一〇

白井順「書簡を通してみた前間恭作と小倉進平の交流―『郷歌及び吏読の研究』刊行の昭和四年を中心に―」『東洋文化研究』第一五号、学習院大学東洋文化研究所、二〇一三

石川遼子『金沢庄三郎』、ミネルヴァ書房、二〇一四

杉田善弘監修・辻大和他編集『小倉進平関係文書目録―学習院大学東洋文化研究所所蔵―』(調査研究報告No.60) 学習院大学東洋文化研究所、二〇一六